

戦後社会運動史資料論 鈴木茂三郎

鈴木 徹三

はじめに

- 1 「ニワトリからアヒル」へ
- 2 国会証言録
在米・極東勤労者大会 労農派 敗戦前後と人物論
- 3 日本社会党創立期
創立期の本部書記研究会，研究会余話 「浅沼発言」と「男子の本懐」，戦争責任について

はじめに

最近，日本社会党を中心に数箱の原資料を大原社研へ寄贈した。入れ代わりに，これまで寄贈した分厚い資料リストを受け取った。あわせると，かなり大量なものになる。しかもなお，今後の執筆に必要と思われるものが多数手もとに残っている。

後世へ伝えたいと思うことは、『大原社会問題研究所雑誌』（『雑誌』と省略）に「社会主義政治経済研究所について」4回，「日本社会党の創立」を2回，「日本社会党と鈴木茂三郎」を3回連載し，大原社研の戦後運動史復刻本として，鈴木らが設立した社会主義政治経済研究所が刊行した『社会主義』，『政治経済通信』の「解題」を執筆した。

これで一段落，と一時は思った。だが，有沢広巳さんの「社会党史は君が書かねば」という言葉が心の隅に残り，他の方々からもおだてられ，生来オッチョコチョイのため，ついその気になったのが間違いのもと。2002年の1月，私も79歳となる。茂三郎は77歳で死去した。年だけは親父を超えた。

鈴木の前中だけの運動史にしぼろうと計画はたてたものの，遅々として筆が進まない。柏のいわゆるシルバー・マンションへ引っ越し，環境の変化にとまどい，最近体調を崩したことも一因だが，何といっても歳にはかてない。多くの運動家から聴き取りを行ったが，日一日と記憶は薄れていく。本音を聞きだすためにカセット類をしばしば使用せず，後で要点だけメモを記し，残りは頭のなかにしまいこんだ。執筆が遅れ，頭脳の老化がかくも早く進むとは予測しえなかった。

しかも，私の場合は電話の聴き取りが多い。執筆中に度忘れしたことや，分からないことは，す

ぐどなたかに電話して聞く。これが私にとって有力な武器だった。初めての方に電話しても、鈴木
の倅だと名乗ると心よく話していただくことができた。調子に乗って警察や警視庁、福田首相へ電
話したこともある。二村前所長は「都留さんに電話して誤りを訂正させたずうずうしい男」と評し
た。これは、いささか違う。電話で疑問点を話し、丁寧な御返事をいただき、「一度お目にかかり
たい」とお願いした。「私は過去にとらわれている時間はありません。現在に生きており、忙しい」
と断られたのが真相である。岩波新書『日米安保解消への道』を執筆中と後で知った。

電話しながらメモをとることは至難であり、後でメモを見ても読めないことが多い。自分の字が
読めないどころか、達筆な書簡類にも手を焼いた。御病気のためにふるえた石橋湛山元首相の書簡
はお手あげ、御本人に頼んで読んでいただいた。

最近、某社の編集者和田有規子、図書館司書の石川久子両女士に頼み、インターネットを利用し
て、種々の資料を集めていただき、その威力を改めて再認識した。下手な文章を書くよりは、資料
（私の頭の中だけにあるものを含め）を残す方が重要であることをさとした。それに、鈴木
の望みは、資料を広く一般に公開し、利用してもらうことにあった。日本近代文学館「社会文庫」への追
加寄贈はほぼ終わったが、大原社研への寄贈は大幅に遅れ、鈴木
の意志に反することになった。

なお、社会党や鈴木
の歴史を研究する人は、大原社研だけで足りるようにしたかったが、昭和初
期までの資料及び週刊誌類は近代文学館の「社会文庫」へ寄贈することになった。後者を読むコッ
を覚えれば、鈴木が素人にも分かるように自分の意見を説明したり、時には、ポロツと本音を洩ら
すこともあり、重要だと思う。鈴木らの運動を研究しようとするならば、御面倒でも近代文学館の
「社会文庫」と大原社研へ寄贈した資料を併せてお読みいただきたい。

というようなわけで、何時、この世を去ってもいいように、どうしても書き残したいことだけを、
とりあえず本誌に掲載することにした。順不同、いささか私見をつけ加える方法で資料を紹介する、
という意味で「資料論」とした。仰々しい表題をつけたものの、単なる紹介に終わる部分もあるだ
ろう。多少気儘に書かせていただく。或いは、すでに公表したこととダブル部分も出てくるだろう。
大目にみていただければ幸いである。なお、原則として敬称は省略させていただいた。

1 「ニワトリからアヒル」へ

1949（昭和24）年12月4日、日本社会党の中央執行委員会（中執）は、全面講和、中立、軍事基
地反対という平和三原則を決定した。第一次分裂、左右合同を経て、51年1月の党大会で鈴木が初
めて委員長に選出され、有名な「青年よ銃をとるな」の就任演説を行った。ここに全面講和、中立
堅持、軍事基地反対、再軍備反対の平和四原則が確立された。この決定は、労働組合など大衆組織
を動かす原動力となった。前年の50年6月には朝鮮戦争が勃発し、戦時中の悪夢を思い出した一般
大衆の心をゆさぶった。講和問題で左右が分裂し、左派社会党（左社）は「青年よ銃をとるな 婦
人よ夫を子供を戦場に送るな」のスローガンをかけ、52年の総選挙で躍進した。「婦人よ」以下
の文句は、選挙対策にあたった大柴滋夫によると、鈴木
の演説に日教組婦人部が「教え子を戦場に
送るな」と唱えたのを勸案して、つくったという。

50年3月、日本労働組合総評結成準備会が開かれた。議長団は松岡駒吉（総同盟）、武藤武雄

(炭労)ら6名だった。朝鮮戦争の起こった翌月の7月、総評が結成され、議長に武藤、事務局長に島上善五郎が選出された。当時、新しい運動の中心は高野・細谷ラインと称されていた。その過程で細谷・高野ラインは崩壊し、細谷松太ら新産別はこれに参加しなかった。新産別元政治部長の三戸信人氏によると、組織上の問題の他、GHQ民生局労働課の意図により総評が結成され、その名称、綱領、規約、運動方針など、すべてがGHQの指導によるものだった。「すべて」というのは誇張しすぎかも知れないが、GHQが主導権を握ったことは確かである。『総評二十年史』はこの問題に簡単にふれただけである。

三戸氏は、エーミス労働課長、ブラッティらが自分達の産別民主化同盟という言葉が気に入りに、どうしても総評に入れと何回も説得された、という。他方、総同盟は11月末に開いた大会で分裂して右派は退場し、松岡は辞任した。大会を制した左派は、予定どおり解散の準備を進めた。その軸となった人物は、高野実総主事である。

三戸らは高野に強い不信の念を抱いていた。大原の『雑誌』442号(95.9)の拙稿「産別民同と山川新党」の項で述べたように、総評結成に際し、高野は「平和三原則は望ましい目標であり、将来達成すべき理想である」と、事実上棚上げした。また、朝鮮戦争が起こると、いち早く北からの侵攻と断定し、国連への協力を唱えた。三戸をはじめ、大多数の進歩的な人は南からと考えており、その発言に驚いた。私自身も例外ではなかった。最近になって、スターリンも承認していたとか、北からの侵攻説が有力となった。南からとすれば、マッカーサーは、緒戦であんなに無様な負け方をしなかったのではないかと、後になって私も考え直した。総評はレッド・パージに対しても、反対運動に消極的だった。

同誌で述べたように、高野を偲ぶ会で何方かが「『青年よ銃をとるな』に反対したのは、敗北だった」と晩年高野が述懐したと語った、と三戸氏からうかがった(三戸氏が語ったように書いたのは誤り)。高野氏と私は会えば挨拶する程度の仲だった。精悍な面魂をした頭の鋭い人という印象で、占領軍の言うままになる人物ではない。「敗北」というのは戦術を誤ったという意味であり、GHQをうまく利用し損なった点を反省したのだろう。

51年3月の総評第2回大会は、平和四原則を決定した。『鈴木茂三郎 戦前編』(『戦前編』)で述べたように、高野は猪俣津南雄の忠実な弟子であり、戦前に労農派が分裂した時、木村禧八郎、萩原厚生らとともに猪俣に従った。戦争の足音が高くなった時、鈴木は山川の共同戦線党論を捨て、加藤勘十、高野らの全評に近づき、労農無産協議会、日本無産党を結成した。戦後も行動をともにしたが、高野の情勢判断力を全く信用しなかった。社会党の若い連中にも、「高野には気をつける」と注意し続けた。高野は、占領軍だろうが、社会党や共産党だろうが、利用できるものはすべて利用した。自ら認めたように、共産党を出たり入ったりした。三戸流に評すれば、「彼の描く幻の共産党に忠実だった」のだろう。

前掲『雑誌』で「ニワトリからアヒル」にふれた。この言葉について『総評二十年史 上』は、高野の著作を引用し、総評がダレスの講和を批判しはじめた時、GHQはガラリと態度を変えた。ニワトリと思ってかえした卵がアヒルだとすれば、彼らの味覚には我慢できなかっただろう。そして「西欧の童話を借用して、有名な『ニワトリからアヒル』へ移行した」と解説した。

三戸氏は、「この言葉が出てきた経緯は明らかにされていない。通訳の誤訳説もあるが、総評が

国際自由労連に加盟しないのに憤慨して、労働課のブラッティが松岡駒吉をレイム・ダックと評した。ニワトリだと思ったがアヒルであり、ガーガーと一日中やかましいからだ。これを鈴木説として発表したらどうかと勧めた。しかし、単に三戸談として公表した。片山内閣末期、経済安定本部のいわば次官とも言うべき都留重人が働かなくなり、民政局のマーカットにレイム・ダックと呼ばれた、と『都留日記』に記されている。そこでlame duckの意味を調べた。差別的用語で申しわけないが、昔の辞書は「びっこのあひる議員」と訳し、「再選には落ちたがまだ任期の残っている議員」というアメリカ語である。転じて「役にたたなくなった人（物）」という意味もある、と記している。最近の簡単な辞書では、「役たらず」と訳したものが多い。

松岡について調べたが、本来の意味ではうまくあてはまらない。爾来、疑問のままに放置しておいた。ところが、99年の秋頃、三戸氏から「カイドだよ、カイドだよ」と急な電話、早速参上した。カイドは、労働省の飼手真吾であり、追想集刊行発起人会編『飼手真吾』（83.6）の一文が氏を興奮させたのである。飼手は「びっこのアヒル」と題して、ニワトリからアヒルになったという名文句は、高野の口から流布されたようだ。「総評がGHQのお声がかかりだということはその当時から紛れもない事実であったし、それが総評反対派の人達の有力な反対理由の一つであったのだから、それを何とか封じこめる必要な人々にとっては、総評はその落とし子かも知れないが、そのいう通りになっていないことをいいくるめたかったのである。そこへこの殺し文句が現れてきた」と問題の背景を明らかにした。

続いて、三戸氏が否定した誤訳説を紹介した。「実はこの名文句はGHQの労働課にいた日本人通訳の誤訳から出ている。差しさわりのある人もあるので詳しく書くのは今でも適當ではない」と断ったうえで、lame duckという米語を通訳は知らなかった。「びっこのアヒル」は、慣用語として「役に立たないもの」の意味だが、「通訳はこの言葉を知らず、lameという言葉も思い出せなかった。とうとうただのアヒルだけで最後まで押し通した。ニワトリの話などは一回も出なかった」と記した。

確かに「おまえはアヒルだ」と何度言われても、当人はキョトンとしていたことだろう。飼手は語学に堪能だったようで、何とか企業の労組委員長連がそろってcompany unionの議長だという名刺をふりかざすのを見て、米国でカンパニー・ユニオンといえば「御用組合」という意味あいが強いと皮肉っている。それはともかく、何故「ニワトリからアヒルへの移行」を強調したか、明らかにした。ただ、誰が誰に語ったかは、伏せた。三戸氏は私に「エーミスが武藤に言ったのだよ」と断定した。

だが、何故、高野がニワトリを持ち出したのか。総評史には西欧の童話からヒントを得たとあるが、それはどのような童話か。そもそも誰が誰にレイム・ダックと話したのか、改めて調べ始めた。たまたま石川氏に話したところ、インターネットを駆使し、平凡社百科辞典で「ニワトリからアヒルへ」の項を執筆した方に電話して「それは運動史の謎です」と答えられてから、私以上に謎ときに熱中し、巖谷小波著、岡野栄その他画の『アヒルトニワトリ』が最も近いようだと同色コピーを送ってきた。そこで、私も近代文学館、巖谷さんの御子息の大四氏に問い合わせたが、何も分からなかった。また、国際子ども図書館に調べてもらったところ、ニワトリとアヒルが登場する話は三つ。最も近いのは、アヒルが仲のよいニワトリに卵を抱くように頼み、アヒルの子が生まれたとい

う話だとの返事だった。

他方、国会図書館からかなりの量の資料を送ってきた。その結果、西洋の民話、童話に該当するものは一切ない。巖谷の話が何に基づいて書いたか、それとも創作なのかも不明であることが分かった。結局、調べた限りでは、巖谷の絵本（大正元年九月、中西書店）が最有力候補として残った。絵本の簡単な会話だけではよく分からないが、アヒルが卵をかえし「タマゴガワレタラ オガアオガア ガアガア コイツハダレノコダ」とアヒルがびっくりし、次のページにたくましい雄のニワトリの絵があらわれる。「アヒルからニワトリ」といえよう。ただし、高野がこの絵本を読んだのかどうか、知るよしもない。また、中国や東南アジアではニワトリとアヒルを飼っている農家が少なくなく、ありふれた民話かもしれない。有名な童話でないことだけは確かである。

三戸氏の証言も、95年と99年では異なっている。私の判断では、95年の話の方が信用できると思う。また、ブラッティ説は少なくとも他に二人の人が主張し、『ものがたり 戦後労働運動史』には、「GHQの労働課員が、松岡駒吉を侮蔑して『レイム・ダック』といった（『戦後大事典』三省堂より）...落合英一書記長（新産別）は『アヒル組合』という用語は、口先だけの転換と揶揄した」とある。ブラッティが松岡にレイム・ダックと言ったとみて、ほぼ間違いなからう。

ただ、レイム・ダック説が有力とはいえず、高島喜久男説（『労働経済旬報』89.9.20）が問題となる。即ち、総同盟の機関紙に第1回総選挙運動方針が載っており、共産党は民主何とか会推薦という形で候補者を出してくる、「下手にそれにのると、にわとりだと思っていたら実はあひるだったということになる」とあり、高野はそれを思い出したのではないか、という説である。この説も推測にすぎないが、或は、通訳がアヒルと訳した話を聞き、童話ではなく、そのことを高野が思い出した可能性もないわけではない。となると、誰がその方針書を書いたのか、その根拠は何か、という振出に戻ることになる。幸い大原社研に総同盟の機関紙がそろっているので、興味のある方はさらに研究されたい。なお、高野は味覚と言ったそうだが、両者のどちらが美味しいかは断定できない。ニワトリに比べてアヒルが「ガアガア」と喧しいのは、インドネシアを訪れた時に実感した。言葉は独り立ちして動く。アヒルの方が喧しいと解釈する方が自然であろう⁽¹⁾。

2 国会証言録

在米・極東勤労者大会

以下、なるべく時代順になるよう努めたい。

拙著『戦前編』で大正時代から敗戦時までの運動史を描いてみた。いざさかこれに追記したい。

1996（平成8）年、国会図書館から『鈴木茂三郎政治談話録速記録』（『談話録』）をいただき、『勝間田清一政治談話速記録』（『勝間田談話録』）も読んだ。これは資料として確実に残るものなの

(1) 脱稿後、高橋彦博がすでに「労働運動の分裂と再編」1979において、49年2月、総同盟の荒川忠雄がGHQあての質問書でニワトリがアヒルの卵をかえず場合がある、と警告したと指摘していることを知った。従って、「西洋の童話」にヒントを得たという高野流独特の証言に幻惑された可能性が高い。「それみたことか」と鈴木が苦笑しているような気がしてならない。

で、特に紹介する必要はないかもしれない。しかし、その存在も知らない人が多いようなので、若干ふれてみたい。

『談話録』では、鈴木も気をつけて話したと思うが、向坂逸郎氏が述べたように、面白く語ろうとする癖がある。私が直接聞いた話をそのまま活字にすると、間違っおそれもある。現に『戦前編』において、早稲田大学の同窓生である国土館大学館長の柴田徳次郎が「毎朝の朝礼で国賊鈴木と訓示しているところぼした」と書いた。敗戦後、いわば私設秘書を短期間勤めた高橋重信氏によると、「柴田邸で同窓会を開いたこともある。検挙されると貰い下げに来てくれた。友達は有り難い」と言っていたそうである。気をつけたつもりだが、まんまと騙された。

また、国会で証言したのは41年末である。次期総選挙に立候補しないことを声明し、長年苦労して集めた運動資料類「社会文庫」を近代文学館へ寄贈し、いささかガックリした時である。記憶力も減退し、証言はいささか散漫であり、ハテナと首をかしげる箇所も少なくない。

1920（大正9）年、鈴木は渡米し、在米日本人グループに加わった。翌年、極東勤労者大会に出席して帰国、日本共産党に入った。勤労者大会への正規の代議員だったことは、その後の研究で明らかにされた。共産党への加入を鈴木が公に認めたのは、『唯物史観』の「わが交遊録」が初めてだった。しかし、その2年前、国会で証言したことは私も知らなかった。

問題は、アメリカ共産党へ入党したかどうかである。『談話録』ではこれを否定した。日本共産党への入党は認めており、意識的に否定する筈はない。おそらくアメリカ共産党へ入った、と私は考えてきた。鈴木自身も警察で一貫して主張し続けているうちに、何かそれが真実のように思われて困るところぼしていた。また、社会党の委員長として、共産党への入党を明らかにすると、あらぬ誤解を招く恐れがあると自伝類でも慎重に隠した。その為に記憶が混乱したのではなからうか。或いは、当時アメリカ共産党は厳しい弾圧下にあり、知らないうちに入党していた可能性もある。日本共産党についても、『談話録』を読むと、山川均に初めて会ってすでに入党したことを知った、というニュアンスを感じる。

1960年、鈴木に同行してソ連を訪れた時、鈴木は片山潜の悪口ばかり述べた。従って、20年には片山が亡命中でアメリカにおらず、片山の『自伝』の文章がまずくて直したというのも、猪俣あたりに頼まれたのだろう。両者はあまり関係がなかったと思った。

しかし、大原『雑誌』506号（2001.1）にメキシコ亡命時代の片山の書簡・草稿類が紹介され、サダ（猪俣津南雄）、ササキ（鈴木茂三郎）、シマ（間庭末吉）から手紙を受け取った、サダが帰国するのは時宜にかなっている、「同志」ササキは直ちに（ソ連へ）出発すべきだ、米日の政治情勢を報告できるように準備すべきである、と片山が答えていることを知った。紹介者の山内氏は、ササキ・佐々木は鈴木の名の暗号名であり、猪俣と鈴木を片山は重視したと解説した。鈴木自身、本名で執筆した新聞のコピーに、自筆でニューヨークで佐々木三郎のペンネームを使って、バンクーバーの共産党系の新聞に執筆したことを認めている。極東勤労者大会に出席し、「政治状況」の報告原文を執筆したことなど、まさしく片山の指示どおりに行動したわけである。これまた、鈴木に騙されたことになる。もっとも、当時はアメリカで「共産黨員以上に活躍した」と『談話録』で自認しており、黨員か否かはそれ程問題ではない。

また、『談話録』では、自伝類と同じように、『読売新聞』の特派員としてソ連に入ったように語

った。さらに、暴力革命について徳田球一と論争し、「徳田は『鈴木帰すな』と言ってね。『あれは新聞記者だから、あんな者帰すな、悪口書くに決まっている』と片山もそう言った。コミンターンでは、この飢餓の最中に一人でも余計食べられては困るから帰せと述べた、と後で聞いた」(要約)と述べた。粗野な徳田と肌があわず、片山について悪い印象を受けたことは事実である。おそらく国内向けとはいえ、同じ『読売』特派員だった大庭柯公の身を案じ、その釈放を片山に何度も頼み、逆に脅かされたことから連想したのであろう。『談話録』でも、まだトロツキーも健在であり、その程度で逮捕されるような雰囲気ではなかった、と語った。大庭も釈放されたと述べているが、事実かどうか、私には分からない。

先にソ連の革命時にシベリアに特派され、今度はモスクワなどで人々の苦しい生活を目撃し、暴力革命のもたらす悲惨さを実感したことは否定できない。他面、アメリカで『国家と革命』を読み、感動したことも事実である。暴力革命の是非について、まだ迷っていた段階とみなすことができよう。それに、大会に出席したり、後に当時を回顧し「体力も知力もガッチリしたスターリン(その講義を受けた)、トロツキー、ジノビエフ、ラディックらの演説」を聞いて感動した、という。モスクワで暴力革命について、徳田と論じる余裕はあまりなかっただろう。

「だろう」続きで申しわけないが、心のどこかで気にかけていた問題について、真剣に考えたのは、おそらく帰途につき、イルクーツクまで一五日かかった列車の中であろう。徳田と合流しウランバートルで暴力革命をめぐる激論した。『談話録』では、「徳田が天皇制について激論した、鈴木はその保持を主張したと書いたのは嘘である」と憤慨している。よく聞かされた話だが、イギリス労働党が共産党の人がレーニンに君主制の是非を尋ねたところ、「何かそれが妨げになるか」、「妨げにならないならば放っておけ」と答えたという噂がモスクワで流れており、天皇制は問題にならなかった、と『談話録』でも語っている。

なお、松尾章一氏は「天幕の外で徳田が自分を殺そうと話しているのを聞き、崖から落とされないように用心した」と聞いたそうだが、これも鈴木流の話し方であり、徳田のことだから酔っぱらって「おまえのような奴は殺してやる」と怒鳴った程度ではなからうか。

『談話録』には、徳田が「何かむこうの信任状」を持って帰ったと想像している。従って、福岡で待っていると徳田に言われ、それを信じて置き去りにされたのだろう。いずれにせよ、船中で猪俣と別れた通称ベル夫人を強引に口説いてふられた片山、「オカ茶屋」でフンドシーつで酒を飲んでいた徳田らを見て、社会主義者はすべて善人である、という鈴木木の幻想は破れた。なお、松本治一郎の死後、福岡時代に彼と知り合った、と回顧した。

徳田については、『談話録』の最後の人物論で、日本代表団のうち、ただ一人レーニンと会って有名になった吉田一を取りあげ、彼から聞いた「徳田という奴はひでえ野郎だ」という話を披露した。「一緒にモスクワから帰った時、吉田と徳田は非常に仲が悪かった。それが吉田君らを依然としてアナキストに追いやった一因だと思う。その時も、上海で金を受け取るか何か指示された布を洋服の襟の中に縫いこんでいた。(モスクワから)『それを持って行け』と言われただけで、英文で書いてあり内容は分からなかった。徳田君は『君は英語を話せんから、持っていっても仕方がない。俺がついていくので預かっておこう』と取りあげ、一人で上海へ飛んでいき、金を受け取って帰っちゃった。後で上海に着いた吉田君は、そのことを知って非常に怒った。ピストルを持って徳田君

を追いまわした。そこで山崎今朝弥さんがどこかの墓場へ二人を連れて行き、まあ何とか納得させた」（要約）と語っている。

労農派

特に目新しい証言はないが、ただ一つ、興味をひいたのは共同戦線党論に関する部分である。色々な人を集め、「労農」の方向へ引きずっていく運動は難しい。山川は「精神的な影響を与える」意見だった。鈴木は「その核」をつくるべきだ、と考えた。「山川さんは、しかしそれなら核というものに絶対に反対したかという、そうではないと思うんです。しかしこれはうっかり言えないことだと思うんです。『核を作れ』と言えば、下手に作ればすぐ引っ張られる。洩れて露顕してしまう」。いま一つは資金面である。核をつくろうと「山川さんに相談した時に『作って見たらどうか』とこう言ったですね」。だが、合法運動に慣れた人ばかりで、非法運動と使いわける器用なことは難しくて手がつけられなかった。「日本無産党を作って、全党をあげて反戦で戦って倒れる、つぶされるというような考え方に一つ転換したのは、その共同戦線党論というものの矛盾を、そこで非常に感じたということです」。

向坂氏から、当時、山川と鈴木はほとんど喧嘩といってもよい程仲が悪かった、もっとも山川は比較的冷静で、鈴木の方が感情的だったとうかがった。晩年の向坂氏は、日によって頭がさえたり、混乱したりしていた。日無党から総選挙に立候補した時、他の労農派同人とともに、菊栄夫人も鈴木の選挙ピラに推薦の辞を書いた。おそらく向坂証言は、正しいと思うが、ことによると、いわゆる山川新党の時期と間違えた可能性はないか、いささか疑問を抱いていた。従って、この部分に興味を覚えたが、真相は依然として分からない⁽²⁾。

日無党といえば、新聞記者時代、関西財界の重鎮平賀敏、財界の大立者の郷誠之助の知己を得、郷に政府へ提出する資料を事前に見せるほど信頼された。また、『談話録』でも語ったように、資本家のなかでも、進歩的な東邦電力の松永安左衛門、鐘紡の武藤山治らを応援した。その武藤らが急先鋒になって軍部に反対し、37年の総選挙で社会大衆党に5万円の資金を渡して同党は選挙で大勝した、と三輪寿壯から聞いたそうである。これは私見だが、同党の予想外の善戦をみて、日無系の支持者が動揺するとは、予期できなかった。

郷は鈴木が新聞社を辞めて社会運動に専心すると聞き、母が経営する書店の資金として千円の小切手を渡した、と『戦前編』で書いた。その部分を取りあげて「鈴木は独占資本家から金を貰う人物だ」という意味の書評を読んだ。おそらく、その人は、当時は片山を尊敬したと推測しうるが、その片山が東京ガス副社長岩崎清七と深い交遊関係を続け、片山の死後、鈴木がその遺族の面倒をみるように岩崎に頼んだことを知らなかったのではないか。

最近大原社研から戦後の経済復興会議関係の資料を復刻中で、一部は刊行済である。資本家とい

(2) 日本経済研究所（鈴木所長）が社会運動史に果たした役割は大きかった。所員だった石山一布氏は、運動史がそれを無視してきたことを憤慨していた。幸いそれに関する資料が残されており、数回にわたり石山氏、伊藤実氏夫妻その他の関係者から聴きとりを行って、『戦前編』で紹介した。石山さんは大変喜ばれた。だが、それにもかかわらず、わが権威ある大原社研の『社会労働運動大年表』までがその存在を無視しつづけたのは何故か。

ってもいろいろあり、困難な戦後の危機的事態に対応する為に、進歩的な部分とは協力するという考え方は、すでに戦前に体験済みであった。

なお、鈴木への検挙後、東京ガスの神谷常務など少なからぬ財界シンパは、軍部に睨まれることも恐れず、子どもの生活を援助して下さった。学業を私が続けさせたのは、それらの方々が各務謙吉記念財団の奨学金を貰えるようにしていただいたからである。また、仮釈放後、鈴木に郷誠之助伝を執筆させ、一年半ほどそれで生活できた。『談話録』を読むと、『読売新聞』の正力社長に「あれはよく書けているな」と言われたと、いう。正力まで関与していたことは初めて知った。

鈴木が人民戦線事件で検挙される以前、『戦前編』では、石原莞爾が鈴木への検挙に反対した、と来客に鈴木が話したことを覚えていると記した。『談話録』には、『中央公論』に鈴木が軍需産業などを分析した論文を執筆した時、軍部は軍機漏洩の罪で鈴木を引っ張ろうとした。その記事が問題となり、参謀本部で論議され、「その係の主任さんが秩父宮さん」で石原の意見を聞いたところ、鈴木が使った資料は議会へ提出したもののばかりである、法律上公開した資料とみなすべきであるということになった。原稿は一部削除され、掲載することが許された。秩父宮が一枚かんでいたことは知らなかった。なお、鈴木は新聞記者時代から、議員連が屑屋に渡した政府提出資料を、金を払って入手していた。

敗戦前後と人物論

徳川邸の会合などは、「日本社会党の創立」で紹介した。「創立」は二回連載し、同じことを二度書く失態をおかしたが、今はふれない。『談話録』では、徳川の意図に賛成したのは加藤勘十ぐらいだ。戦前はカウツキーを馬鹿にしてあまり読まなかったが、戦後改めて読んだ。保釈後に「民主主義の理論」に対する理解が非常に浅かったことが間違いだったと気づいた、と語った。

その他、産別民同の話など、戦後の運動について興味のある証言を少し行ったが、この部分は、他の資料とともに後で紹介する。

最後に、質問に答えて人物論じみたことを語ったが、ここが最もおもしろい。全部紹介するわけにもいけないので、二、三紹介しておこう。

佐野学君が逮捕される前に、鈴木が手配して上海へ逃がした。その為に研究室を調べ証拠を握られて、共産党事件が起きた。転向し、戦後に社会党へ入党したいと手紙をよこした。気の毒だが認めない、党外から注意すべき点があれば指摘してほしい、と返事を書いて終わり。

猪俣は第一次共産党事件で検挙された時、頑として党员であることを認めず、他の者に迷惑をかけた。治安維持法はまだ制定されず、認めても一年半くらいの刑にとどまり、皆が「早く認める」と説得しても、自分は純情な大山郁夫に党员でないと否定してきたので、大山を裏切ることはできないと言い張った。猪俣らしい思考様式、後に鈴木が「仏さまのように純真」と評した大山の人間性を物語るエピソードである。

加藤に誘われて鈴木や吉田一は、徳川義親侯爵邸を戦時中訪れていた。『談話録』では、「吉田の全快祝いの際に、徳川も出席した。吉田は徳川に向かって、もう五年生きる。自分は字を知らないのだからこれから習う。口で伝えても疑われるから、書き残すために習う。それはヨッフエを連れて来るために、藤田勇から頼まれて北京へ食うや食わずの旅をした。そこで六〇万円もらい、また貧乏

旅行をして帰国し、藤田に渡した。二百円くれ、残りは藤田が自分の贅沢のために使ってしまった。貴方が信用している男（徳川の秘書格）はそういう男です。それを書き残して死にたいんだ、と言った所で、徳川が吉田の脈を診たら死んでいた。徳川は『あの死には実に羨ましい。ほんとうの大往生だ』（要約）と感嘆した、と語った。鈴木は早くからこの話を聞いており、藤田に不信の念を抱いていたことは、大原社研の『雑誌』で既に明らかにした。吉田が死んだのは66年9月であり、その臨終時に徳川がいたかどうか、にわかに信じがたい。しかし、あの殿様の動向は奇想天外なところがあり、鈴木流の嘘とも言いかねる。私個人は、吉田が戦時中に徳川邸でその話を紹介した、と思っている。

最後に、私についてもとんでもないことを語っている問題を紹介しよう。「松本高校生が戦争中に研究会を開いて警察に引っ張られた。私の息子だということで、俣も巻き添えを食った。皆に頼んで出してもらった。出てきた人の話を聞くと、数人の学生が留置場で『革命段階がきた』と革命が起こるのを待っていた」（要約）と語っており、あきれた。特高の記録には私が検挙されたことになっているそうだが、事実は任意出頭だった。調べた刑事は擻猛そうだったが、「父は鈴木茂三郎、職業は著述業」と答えても、茂三郎が何者であるか知らなかった。シメタと思い、研究会に所属していませんと嘘をついても、何の反応もなかった。それでも最初は「幾ら嘘をついても、家宅搜索しているからな」と強がっていたが、社会主義や自由主義関係の書物を隣家に隠しておき、机のなかに「ああ金がほしい、恋人がほしい」というくだらない詩を入れておいたので、そんなものばかりを押収してきた。ガッカリした刑事は、先に逮捕した宮内（戦後、立命館大学教授）が「おまえを将来有望な男だと述べた」と理由を明らかにした。親父の息子だから逮捕されたわけではない。もっとも、事前に新聞記者で警視庁特高担当の叔父に頼んでおいたので、保釈中の鈴木も心配しただろう。叔父の働きかけがあったのか、後の県特高の調べも鋭くなかった。しかし、もともと念のために「検挙」されたにすぎず、「土地と資本はすべて天皇のものである。それを一部の金持ちや地主が利用しているのはけしからん」と「現在の心境」を書いて終わり。「私有財産制度」を否定したのは治安維持法違反だが、皇国史観を借用して天皇のものと言っておけば、後は用語に注意しながらマルクスの主張どおり書けば、文句はなかった。戦争を憂いて逮捕された私の先輩や友人たちが、留置場で「革命近し」などと考えたとは、人を侮辱する誤った回顧である。何度も私が聞いた昔話であり、それを私に結び付けたのである。しかし、『談話録』全体があやしい、ということではない。最後の雑談部分で、もう終わったと気を許し、うっかり脱線したのであろう。

これで『談話録』は一応終わり、後は随時引用することにしたい。

3 日本社会党創立期

創立期の本部書記研究会

拙稿「日本社会党の創立」で記したように、創立に際して、西尾末広ら右派の旧社民系の力が強く、途中から加わった旧日労系の勢力は相対的に弱かった。加藤勘十、鈴木らが活躍したとはいえ、もともと左派の勢力は極めて弱かった。常任中執に片山書記長、松本治一郎会計を加えて15名、うち左派は加藤、鈴木、黒田寿男、松本の4名にしかすぎず、松本はその会議に出席できなかった。

中執96名のうち、私が知る限りでは、左派はごく少数である。もつとも、常任のうち「人民戦線事件」前の日無系2名に比べれば、社大党に属していた黒田、松本と同じ党に所属することになり、社民党の良心といわれた原彪が存在し（後に左社に所属）、見方を変えればそれほど弱体とはいえないかも知れない。なお、野溝勝は、加藤宣幸氏らによれば、当時は右の右であり、農民運動の抗争のため左派に転じたにすぎないそうである。

西尾は結党時に「どうせ日無系は少数だから、党内で少々あばれても何とか押えて行ける自信があったし、国内で派閥争いはできるだけさけるのが得策だと考えた」と回顧した。鈴木は鈴木で「西尾君らは階級協調的議会主義とでもいえるような思想に固定し、性格的に一族的、独裁的であり、片山君らを抱擁できない肌合いを持っていた」と評した。前掲国会『談話録』では、民社党を批判し、西尾の新党は「右派的なイデオロギーを意識的にちゃんと一つ持っている。だが、西尾という人は、性格的に自分の考え以外の人とは一緒に行動を取れない」とその限界を指摘した。また、中間派の旧日労系は、左派が強ければそれに同調し、右派が強ければ右派につく。本質的には右派に近いのではないか。思想的に固まるというよりは、むしろ人的に固まって面倒をみあう仲間、と評した。

鈴木の一貫した戦術は、戦前無産政党がバラバラに分裂して日本のファッショ化を許した過去の誤りを反省し、極力社会党の統一を守る。西尾らとはいずれ別れるだろう。その為にはできるだけその同調者を少なくしていく、ということだった。鈴木を偲ぶ座談会で、木原実氏は「鈴木さんほど戦略・戦術の重要性を主張した人はいない。しかし、鈴木さんほどその実行がまずかった人もいなかった」と評した。木原氏は鈴木ときわめて親しく、いわば身内からの好意的な批判であり、甘受すべきであろう。

また、鈴木は戦前に民主主義というものの研究が不十分だった、と反省していた。しかし、戦後かなり勉強したようだが、本当に理解し得たかどうかは、疑わしい。

創立期に劣勢といわれた左派が、その後躍進した原動力は、基本的には社会情勢の変動であろう。具体的には、青年部の活躍、社会主義政治経済研究所（46.1.25 創立）、機関紙の発行（46.1.15 創刊）、労働組合における支持勢力の増大がもたらしたものである。

そこで、当時は青年だった創立時の本部書記の研究会に私も参加させてもらうことにした。社会党本部書記局OB会が『われら回想の“三宅坂”』を刊行すると聞き、早く実現するようにけしかけて、いやお願いで98（平成10）年3月、同書は無事出版された。それが縁となり、また、大原社研の『雑誌』に社会主義協会派に属さなかったと記したこともあり、加藤宣幸氏（加藤勘十氏の長男）の事務所で開催される研究会に参加することができた。宣幸氏とは、敗戦直後、新橋の焼ビルで会ったことがある。その後、彼は世田谷支部の役員にもなったが、それほど親しくなかった。

98年、99年、加藤氏の事務所で開催された研究会に二度招かれた。正確なメンバーは忘れたが、『社会新聞』関係を中心とする元社会党の本部書記、それもかつて江田派と呼ばれた人が多いのには驚いた。もっとも江田三郎を批判してもそれほど気にしない連中の集まりで気楽だった。

一度は、福永文夫氏が占領下の社会党政権について報告した。九九年は、「社会党の創立について」をテーマとした。鶴崎友亀、加藤宣幸、貴島正道、竹内猛、四谷信子、野沢慎之助、初岡昌一郎（姫路独協大）ら10人以上が集まった。森永英悦氏（2000年に逝去）、矢野凱也らは病欠と記憶

している。

後者の研究会では、主として大原社研の吉田健二氏が執筆した『社会思想』の「解題」、大原の『雑誌』に同氏が発表した論文、それに拙論など簡単なメモと質問文を配った。次の文はそれに若干手を入れたものである。

日本社会党創立期メモ（「社会新聞」を中心に）

鈴木 徹三

1945. 昭20

- 8.24 徳川義親宅に西尾、水谷、加藤、鈴木ら会合。旧社民系、日無系が中心、日労系は三宅らが有馬党首構想
- 9.22 安部、高野、賀川の呼びかけにより結成準備会、激論となりもめる
- 10. 3 日農結成準備世話人会（片山、平野、黒田、岡田、大西ら13名。準備常任委員に野溝、岡田、大西、黒田ら。書記局の下に高野啓吾、46年より下田弘一が活躍
- 11. 2 日本社会党結党大会、平穏なるも天皇陛下万歳に小堀ら退場
- 11. 4 中執、『社会新聞』発刊決議、情宣部長水谷が責任者
- 12. 山水社（竹内克己）に発行委託、山平太郎、山崎一雄、日本農業新聞印刷（元日本経済研究所員石山一布）
- 46. 1. 1 『日本社会新聞第1号』「発行所日本社会党、一ノ十四堤七、発行兼印刷 山平太郎、編集山崎広」。3万部、実際の発行所は西銀座6滝山ビル内散水社、門田武雄が中心。2号は10万部、3～7号より東京新聞が用紙供給。7万発行、3万は闇流し。駅売りが寄与。7号から堤ビルより発行
 - 1.11 山川均、民主人民戦線提唱
 - 1.17 総同盟結成
 - 1.25 社会主義政治経済研究所設立（鈴木所長）
 - 2. 9 日農結成大会（芝、日赤講堂）、1月には社・共対立をめぐる黒田声明
- 46. 4.10 総選挙、社会党93名当選
 - 5.24 「日本社会新聞組合」（外部には「日本社会新聞社」と名乗る）に委託（片山、西尾、田原春次、斉藤貢）。8号（6.5）より党から独立した社会新聞社発足。社屋は第2堤ビル5階。資金は田中斉負担。
 - 6.23 第9号（6.12）より発行人本田清に代わる。社会党の中央機関紙としての機構。但し紙面で明確になるのは第10号（6.23）。「堤ビル、社会党本部内日本社会新聞社、発行兼印刷本田清、編集山崎一雄（党本部事務長、その後広と交代）」と表記。編集局次長の門田が活躍。社の社長片山、業務局長田原、編集局長山崎広、発行印刷本田。田原、田中、斉藤3人が社を運営。田中、牧野、榎本、姫野（名前不明）、成本南常、山口房雄、緒方秀一（人事は西尾と田原）
 - 8月 門田、田中、姫野ら退職、左派の緒方、山口が中心
 - 9.26 社会党第2回大会、片山委員長、西尾書記長選出。出版部設置（『社会思潮』へ）
 - 9.28 『社会新聞』と改題
- 10月初 社会党社会思潮編集局（党決定か不明）、丸岡尚、弟治、岩根正雄、印刷は読売新聞に代わる
- 11月 米窪満亮主幹、左派對策。第28号（11.23）より米窪編集
- 12月 正規社員22名（牧野、西田、長田英夫、清沢文人）、7月には広告部長として大須賀一就任、夏に山口の紹介で貴島入社、両山崎は義兄弟
- 47. 2. 1 ゼネスト禁止

- 2月 『社会思潮』創刊,「新聞」の西田が2.19神田共立講堂で「600万人が楽しむ会」をピクチャーと提携して開催して辞める。後始末に困惑
- 4.25 衆議院総選挙,社会党143議席獲得
- 5月 左派五月会を結成(研究所内),新聞の左派化
- 6.01 片山内閣成立
- 8月 田原追放,米窪大臣就任,第63号(8.11)より細川隆元編集局長,営業局長の田中,その後任の林大作,いずれも議員の為忙しく,左派色強まる。成本南常も米窪に近すぎ右派とみなされ1月末に辞任。夏に長田英夫入社,少し遅れて清沢
- 10月 思潮編集委員会は片山,水谷,浅沼,森戸,杉山元治郎,和田,河上,三輪,河野,丸岡尚。水谷が主幹(社会思潮)。10.8にガード下に移る。「社会新聞」に切り替え。内幸町1,48.6に完成,約51.5坪。これを置き土産に本田辞任(社会新聞)
48. 2.13 産別民同結成
- 3.10 芦田内閣成立
- 4月 飯島博社会新聞社に入る(斉藤推薦),業務には大須賀一活躍
49. 稲村順三局長(4月大会で社会党は鈴木書記長)
50. 1.16 第一次分裂(至4.3),『社会思潮』は休刊
4. 3 統一大会,金子洋文機関紙局長に選出
- 8月 『社会思潮』復刊
- 51 1.19 社会党第5回大会,鈴木委員長,浅沼書記長。平和四原則決定
- 7月 『社会思潮』また休刊(岩根病気などのため)。11月麻生良方第36号編集,明確に右派機関誌,52年2月が最終号
- 10.20 『社会新聞』第315号で休刊。左社は『週刊社会新聞』と改題,発行人稲村,編集緒方で325号(52.1.28)まで発行。右社は『社会週報』,『日本社会党党報』ついて『日本社会新聞』発行
- 10.24 社会党分裂
52. 2.28 左社『社会タイムス』創立総会,3.1に創刊

質 問

- (1) 社会党本部所在地 結党後二,三ヶ月蔵前工業会館,四六年末に港区新橋二ノ二第二堤ビルへ移転(48,49年『時事年鑑』)。千代田区永田町1-4へ移転した時期は何時か。
- (2) 創立時の本部書記名
浜某(松本推薦),社民系の山崎一雄,山崎広,日労系の伊藤英治だけか。
- (3) 46年3月以降の本部書記名
同年3月に加藤宣幸,矢野凱也(加藤の高工時代の同級生,後の加藤勤十労働大臣秘書,結党時に2人ととも青年部書記,形式的には1月1日に遡及して本部書記)。同3月に山口房雄,9月に貴島正道,遅れて大柴滋夫,森永英悦らが参加した。また,機関紙担当として緒方秀一,野沢慎之助が加わる。5月に清水徳松,10月に四谷信子参加,48年春頃に只松裕治,49年4月にに竹内猛,(同月頃込沢賢一),9月に藤巻新平。同年に『社会新聞』入りした木原実は本部書記になったかどうか当人も不明。洩れている氏名は?(加藤宣幸氏談,『回想の三宅坂』に基づく質問)『青年社会新聞』を党機関紙とした年鑑もあり,鈴木も『史料』で機関紙としている。
- (4) 日農関係本部書記名,所在地
- (5) その他,歴史に残すべきだと考えられる事項

創立時の本部書記数について、吉田氏の聴き取りのように4、5名かと尋ねたところ、「10人以上だった」と全員が答えた。山崎広らは結党過程から書記を勤めていた。松本推薦、唯一の左派だった浜某の名前は分からなかった（福岡が水平社関係と推定されるが、心あたりのある方はお知らせ願いたい）。

『青年社会新聞』は青年部の機関紙であり、野村が担当した。『全国青年委員会』は青年部とは直接関係がない。赤松勇らが中心となり、どうみても青年とは思われない人々をも含めて組織し、赤松が委員長になった。

そこまで聞いて、何時三宅坂へ移転したか、と私が質問した。鶴崎氏はそれが本日のメイン・テーマだと述べ、2時間以上それぞれが発言したが、結論が出ないまま散会した。同窓会のような雰囲気になり、座が乱れて聞き取れなくなった。辛うじて、藤巻は曾根益の推薦で入り右派だった。本部書記の給料は極めて安く、公務員並になったのは、左派社会党になってからである。四谷さんが若い時に新橋の焼けビルに泊まりこみ、浅沼稻次郎に叱られた思い出話などを聴きとることができた。岡田春夫は共産党員だったかと尋ねると、全員が「そうだ」と答えた。しかし、幾つかのグループをまわり、次々と変わる話題についていけなかった。ただ、隣に座っている貴島氏に「構造改革と鈴木」について質問し、「鈴木さんはグラムシまで読んでいた。今さら何も言うことはありません」と聞くことが出来た。当日の会合は鶴崎氏が録音しており、なんらかの形で残されるだろう。

私の記憶では、焼けビルを改装した三宅坂へ本部を移転したのは、49年7月初旬頃だったと思う。

大勢集めれば、何か収穫があると期待していたが、かえってうまくいかないものである。その後、研究会は開かれていないそうである。

なお、鈴木が残してくれた原資料類のうち、創立前後に関するものは極めて少ない。また、伊藤好道氏の所蔵資料は、逝去後に東京のマンションの押入れにそのまま保存されており、伊藤よしこ夫人からそっくりいただいた。従って、社会主義政治経済研究所や片山内閣時代以降の資料は豊かである。『史料』で鈴木が使った創立過程の資料類は見当たらない。おそらく誰かから資料を借りて書いたのだろう。

私は向坂直系とみなされていたそうである。その為に、党本部の資料を保存しようと努めたが不可能だった⁽³⁾。

すでに書いたことだが、広沢賢一氏が党資料室を整理し、同室の顧問に私を推薦した。その仕事は引受けざるを得ないと覚悟したが、社会党から何の話もなかった。山本政弘氏が副委員長になっ

(3) 個人的に向坂氏と親しかったことは事実である。従って逝去された時、葬式は行わず、書斎の廊下にお棺だけおき、来られた方は庭でそれぞれ弔意を表する形式をとった。大変寒い日で、控室にはゆき夫人、某大学教授と私も夫婦だけが炬燵で暖をとった。時々、お棺の横に夫人が座り、弔問客にお辞儀されていたが、寒くて5分も耐えられなかった。見かねて、私がしばしば交代した。誰がみても向坂直系と思ったであろう。

控室では、「お墓はどうされますか」など雑談をかわした。「お庭に埋めようと思っています」、「それは違法ですよ」、「アラ、マル（向坂氏の愛犬）だって庭に埋めましたよ。犬と向坂さんを同一視し、如何にも真面目そうな顔をして話されるのを見て、これではなくてはあの通称「頑固親爺」の奥さんは動まらなかっただろう、と思った。

た時、その部屋の入口に「副委員長室」「資料室」と表示されていた。氏の蔵書が何冊か置いてあるだけで、資料類はきれいに無くなっていた。『五十年』の資料集を作成するため「鈴木は協会派だからここに持ちこんだに違いない」と、国際局の書記が大原社研へ探しに来た、との報告を受けてあきれた。おそらく協会派と目され、広沢氏の勧告を無視したのであろう。

資料室から創立期の貴重な資料を借りた方、上階の一室に社会党の資料が放置されていると噂される東京の某有名私立大学。もし事実とすれば、関係者は既に退職していると思うので、是非公開してもらいたいものである。

研究会余話 「浅沼発言」と「男子の本懐」

98年の研究会において、鶴崎氏から「浅沼稲次郎生誕一〇〇年記念シンポジウム」を開くので、呼びかけ人になるように頼まれた。浅沼さんを偲んでも二一世紀の展望は出てこないと断ったが、「その通りですが、名前だけ貸してほしい」というので承諾した。送ってきた呼びかけ人の顔ぶれをみて、大学教授の肩書がついているのは私一人だった。この間まで、南原繁氏とか田畑忍氏とか大物が呼びかけ人だった。今は小物の私だけかと、恥ずかしさとともに寂しさを感じた。

11月12日に会合が開かれた。呼びかけ人のうち社民党の土井氏、民主党の横路氏、連合の堅山、山岸両氏は顔をみせず、私に代表として最初に挨拶せよという。あわてて長老に頼めという、私が一番年よりだという。ままとツルカメさんの罨にかかってしまった。

幸いにも、『勝間田談話録』を読んだ直後だったので、「アメリカ帝国主義は日中共同の敵」という浅沼発言の裏話を披露した。59年3月に浅沼稲次郎書記長を団長とする第二次訪中団が北京に到着した時、浅沼は先ず人民外交学会へ挨拶に出かけた。随行記者団は挨拶程度だからと向井共同通信記者だけが同行した。挨拶後、浅沼は「日本はアメリカに占領されています。台湾もアメリカに占領されています」と言った。すかさず、張奚若は「アメリカ帝国主義は日中両国人民の共通の敵ですね」と述べた。浅沼は「まあ、そうですね」とか相槌をうった。このやりとりを一同は重視しなかった。

ところが、向井記者はこの発言を日本へ打電し、翌日の新聞は大々的に報じた。この情報を知らされて訪中団はびっくりした。しかも、自民党の福田赳夫が北京に抗議電報を送り、事態はますますエスカレートした、と勝間田は回顧した。浅沼発言については、後でまた取りあげたいと思う。

集会では、これに続いて1930（昭和5）年11月14日、浜口雄幸首相が東京駅で狙撃された事件にふれ、新聞記事はあまりあてにならないことを述べた。

その出典は、世間に余り知られていない福林正之『神様になった怪傑』（鏡浦書房、67年）に出てくるエピソードである。同書は、旧制松本高校の大先輩にあたる元報知新聞記者福林が、同級生で金光教の怪傑福田美亮の思い出を書き、それを松高八〇年祭のために記念復刻したものである。金光教はともかく、新聞記者として狙撃事件にふれた部分に興味をひかれた。

「浜口首相が撃たれた時は、もちろん私も駆けつけたが、そのとき首相はすでに駅長室に担ぎ込まれていて、その姿を見ることができなかった。そこで、お定まりの駅員の話や目撃者の談話などを取材して社に帰ると、先輩記者の西村丁一がせっせと原稿を書き飛ばしていた。

彼はたまたま現場に居合わせたため、素早く秘書官や護衛の警官の中に混じり、倒れた首相の足

を担いで、そのまま駅長室に紛れ込んだのである。だから、撃たれた直後の首相の状態は、新聞記者としては彼ひとりしか知らない訳である。いわば大特種である。

满面紅潮させて書き上げた彼の原稿は、やがて『浜口首相いわく、男子の本懐』という大みだし下の華々しい号外となって街から街へ飛んで行った。こういう時こそ、新聞記者が最も生き甲斐を感じる時である。私はうらやましかった。

『西丁さんよ、ほんとに首相は男子の本懐なんて言ったのか』

『そんなことをいうもんか。痛てえ痛てえって呻いていただけだよ』と、西丁さんは事もなげに笑った。

歴史というものは、おおむねこんなふうにして作られるものだということを、そのとき、私は学んだ」

以上の文章を簡単に要約して、挨拶をしめくくった。この会合に『読売新聞』の浅見伸夫政治部次長が出席し、後に、同紙で私の話した浅沼発言を紹介した。さらに、99年12月28日号の「政界ウオッチング」で「男子の本懐」に関する私の話を正確に紹介しただけではなく、同事件を報じた『報知新聞』夕刊まで読んで論評した。夕刊には「男子の本懐」と見出しをつけ、「(輸血によって)首相の顔色は赤みをおびて来て...首相は夏子夫人らに向かって『かかることは男子の本懐である』ときっぱり言った」と報じているそうである。

簡単な挨拶ということで、私は「号外」という言葉を省略した。特種を掴んだ西丁さんが、現場にぐずぐずしている筈はない。「男子の本懐」と「号外」を飛ばした『報知』も、その言葉にそって夕刊を編集せざるを得なかっただろう。ただ、おそらく狙撃直後ではないと知って、紙面を作成したのであろう。

城山三郎著『男子の本懐』は、一時健康を取り戻した浜口の『随感録』などによって執筆したようである。しかし、医師の手当てを受け小康を得た後ではサマにならない。そこで、駅長室へ駆けつけた鉄道病院の医師に「浜口はうすく目を開けていった。『男子の本懐です』」と書いたのではなからうか。城山によると、浜口は狙撃されて「殺られるにはまだ少し早いな」とトッサに感じた、と『随感録』で述べた。何か言えたとしても、志半ばで撃たれたのだから「無念」という意味の言葉のほうがふさわしかったのではないか。にもかかわらず、狙撃時に「男子の本懐」と言ったと伝えられてきたのは、この「号外」のためだろう。

なお、このシンポジウムとは別に、佐々木派などを中心に、浅沼を偲ぶ企画が行われたことを後で知った。98年になってもまだ派閥対立は消えないのか、と驚いた。

戦争責任について

拙稿「日本社会党の創立」において、結党を呼びかけた安部磯雄、高野岩三郎、賀川豊彦の三長老、西尾末広、平野力三、水谷長三郎という結党三人男について、論評した。

長老のうち、賀川の批判に力点を置いた。しかし、キリスト教について暗いために、改めて知人にアドバイスをお願いした。

一つは、賀川が戦争に協力した理由を問われ、『聖書』「ローマ人への手紙」のなかの「もしわが兄弟わが骨肉のためならんには、我みずからこわれてキリストにすてらるも、亦ねがうところなり」

を無言で指し示した。「イエスに問いかけた箇所だが、イエスの答えは記されていない」と私が書いた部分である。イエスは生前にパウロに会ったことはない、と注意された。

『聖書』を読み直したところ、この箇所はパウロが自分の考えを述べたところである。また、イエスが十字架にかけられた後に、パウロはダマスカスへの道で天からの光に倒れ、イエスの声を聞きキリスト教徒になった、とある。私の誤りである。

また、「日本基督教団は現在にいたるまで、自己の責任を明らかにしたことはない」と記した箇所について、戦時中、侵略に協力して天皇を礼拝したことを反省し、平和憲法を守る運動を行うために、51（昭和26）年に「キリスト者平和の会」が結成された。67年3月26日には、日本キリスト教団の全国総会において、戦争中におかした罪を懺悔し、神と世界と日本の国民に許しを請うことを決議した。これについて、その後さまざまな異論が出ているが、日本のキリスト教史に画期的なことだった、と教えられた。

なお、アメリカ的・清教徒的な日本のキリスト教について、高説をうかがったが、無宗教の私には、その是非を論じる資格はないので省略する。

拙論において、賀川のほか、社会党に参加した人の戦争責任、公職追放についてふれた。気の重い仕事だった。最近、増田弘『政治家追放』中叢書を興味深く読んだ。鈴木が日本無産党から衆議院選に立候補した時、弾圧を恐れずに応援した市川房枝さんが何故パージされたか、疑問に思っていたが、ある程度理解できた。加藤シズエが囓んでいたことも予測どおりだった。その他の人々についても、教えられる点が少なくなかった。

だが、氏の書かれた他の論文を読んでおらず、氏自身も「アメリカの、アメリカによる、アメリカのための」パージで終わったことが欺瞞、矛盾、汚点を残したことを認めている。従って、天皇をも含めた戦争責任とは何か、簡単でもよいから著者の見解を明確にしてほしかった。また、戦争責任をパージで解消できるものだろうか。経営責任をとった経営者のパージまで同一視されると、その点が不安に感じられてならない。戦犯問題はさておき、戦争責任はすべてパージで行われるという前提にたてば、当然責任をとるべき人々がパージを免れたり、パージされた人々も、国際的条件的変化により解除されて責任は免責となる。それは侵略戦争の責任回避につながるのではなからうか。日本の場合は特殊だという論理は、一般論として、責任の追及を曖昧にするおそれがある。

最後に、参考までに鈴木の見解を紹介しておこう。鈴木は、戦争が起きる前から協力的な者、戦時中やむをえず協力した者に大きく分けて、前者を戦争責任者と考えた。そして、前者が中心となって社会党を組織したために、苦労したと回想した。おおまかな分け方だが、的はずれともいえない。つけ加えれば、拙論で述べたように、真に責任を反省したか否か見極めることも必要であるう。

（すずき・てつぞう 法政大学名誉教授）

本稿執筆後、横関至「日本農民組合の再建と社会党・共産党（上）」大原『雑誌』514号、2001.9において、三宅正一について不勉強だと叱られた。鈴木の子生三七あての書簡で伏せ字の人名は、三宅と断定してよからうと書いた部分である。しかし、他の資料を読むまでもなく、羽生さんと私は親しかった。問題の書簡を持参され、氏から直接お借りしたので早くから知っていた。あえて「断定してよからう」としたのは、石川真澄氏から伝記執筆時に伏せ字にしてほしい、と羽生氏に頼まれたと聞いたからである。また、この書簡を見るまで

もなく、戦時中の行動がたたって中間派の動きがにぶい時、ただひとり三宅が暗躍したこと、日労系の有力者の三宅が準備委員をはずされた事実に関する新聞報道その他多くの資料により、自明の事実であった。

羽生氏は人格者であり、左派に属したポスト争いを嫌い、外交専門家として独自の道を歩いた。『戦前編』で上伊那郡と誤記し（158ページ）、「下伊那郡飯田町です、上伊那郡では野溝勝が活躍していたが、彼は右でした」と訂正された。野溝が左社書記長など要職についたことに批判的だったように感じた。しかし、野溝より憎んでいた三宅の名前すら明らかにしなかった。人の悪口を言わない方だった。逝去後、鈴木書簡、高野実書簡は誰にも見せるなという厳しい遺言を残されたと、遺族の方からうかがった。

横関氏は、私に山室論文を読んでいないと非難したが、逆に大原『雑誌』に連載した拙論「日本社会党の創立」を何故読まなかったのか、理解し得なかった。『片山内閣と鈴木茂三郎』は、社会党副委員長だった山本政弘氏に一ヶ月で単行本を書けと言われ、苦しまぎれに書き飛ばしたものである。その罪ほろぼしに執筆した「創立」には、もうよかろうと伏せ字にせず、三宅と明記した。私自身、その「創立」にも不満であり既に書き改めた（未発表）。「創立」は批判されても仕方がないが、大原社研の研究員たる人物がその機関誌も読まず、何故旧著を問題としたのか、理解しがたい。

わが国初の画期的な企画

世界45カ国の社会福祉の現状を鳥瞰し21世紀を展望する。

世界の社会福祉

全12冊

世界45カ国におよぶ社会福祉の法令・制度・政策の歴史から現状までの全体像と先進事例――

高齢者福祉・児童・家庭福祉・女性福祉・障害(児)者福祉・公的扶助・医療保障・専門職養成の教育システム・地域福祉など社会福祉・社会サービスの現状を国・自治体レベルで記述。

全巻セットセール

●残部僅少揃え100,200円(本体)

社会福祉の基本法・保健・医療・福祉の連携システムの実態・サービスの内容や組織・運営・福祉専門職・ボランティア・福祉文化の現状など、豊富な写真・図版・イラストを使って解説。

21世紀のわが国の社会福祉のあるべき姿を考える上で不可欠な各国の基本資料を収録。

日本と世界から参加した第一線の研究者・実務家180名による共同の執筆

編集委員代表 **仲村 優一**（日本社会事業大学名誉教授） **一番ヶ瀬康子**（日本女子大学名誉教授）

旬報社創立50周年記念出版